

総 説

[総説]

献血推進—検診医の立場から

日本赤十字社東北ブロック血液センター

中川國利

Blood donation promotion — From the standpoint of a medical doctor

Japanese Red Cross Tohoku Block Blood Center

Kunitoshi Nakagawa

抄 録

若年層を中心とした献血者減少に加えて原料血漿確保量が増大し、血液を安定供給するためには血液センター全職員が積極的に献血推進に取り組む必要がある。そこで検診医として検診業務を担いながら、献血を推進しているので紹介する。問診時には事務的な会話に加え、献血者に謝辞を述べ、献血者減少の実情を説明し、献血に伴う利点を語り、採血基準を伝え、献血者の想いを傾聴する。さらに検診業務に余裕がある際には、献血呼びかけや献血推進ミニセミナーなどを行う。献血者との会話により、互いに親近感・連帯感を覚える。そして献血者は献血行為による社会貢献に達成感・充実感を再認識し、次回献血を確約し、友人・家族を献血に誘う契機となる。一方、検診業務を担う検診医にとっても、血液事業に従事する充実感・幸福感を覚える。検診医の検診業務を行いながらの献血推進は、血液センターの責務である血液の安定供給に寄与している。

Key words: blood donation, blood donation promotion, standpoint of a medical doctor, steady blood supply

I . 献血推進の取り組み

1. 問診時における献血者との会話

1) 献血者に謝辞を述べる

多忙にもかかわらず、採血時の疼痛・副作用をも了解の上で、無償で協力する献血者に感謝の意を伝える。とくに遠方から来場した献血者には住所地名を、頻回の献血者には献血回数を、猛暑や厳冬期には時候を添えて厚く感謝する。また友達や家族と来場した献血者には、誘い合って献血に来てくれたことに謝辞を述べる。すると献血者との会話が弾み、互いに親近感・連帯感を覚える。

そして献血者は献血による達成感・充実感を覚え、晴れやかな微笑さえ浮かべる。さらには次回の献血予約や複数回献血クラブの入会にも同意し、献血会場での待機時間短縮と採血ベッドの有効活用にも繋がる。

2) 献血者減少の実情を説明する

献血者はそもそも血液事業の協力者であり、献血の重要性を良く理解している。しかしコロナ禍で献血者が減少していることは認識しても、若年層を中心として献血者が減少していること、有効期間が短い血液は常に採血し続ける必要があるこ

と、原料血漿確保量増大に伴い必要献血者数が増加していること、などを知る献血者は意外と少ない。そこで図表を用いて説明をすると理解がさらに深まり、次回の献血や知人・友人・同僚・家族への献血推進を確約してくれる（図1）。さらにはプラカードを持ち献血を呼びかける熱血漢まで現れ、献血者の高いモチベーションに感銘を受ける。

3) 献血に伴う利点を強調する

献血した血液で患者の命が救われるばかりではなく、献血者自身にとっても血液型、貧血、肝機能、糖尿病、高脂血症、さまざまな感染症などの検査結果が判明し、健康管理に有益であることを説明する。また献血回数に応じて顕彰規定や表彰制度があることも付け加える。すると健康管理を目的に、さらには献血回数を重ねる新たな意義を見いだす献血者も現れる。なお献血会場での飲料水や菓子は採血に伴う副作用防止対策で提供していることを説明し、採血前からの飲食を勧める。

4) 採血基準を伝える

献血年齢は16歳から69歳まで、また降圧剤や抗アレルギー剤などの内服者、がん既往者でも5年間無再発であれば献血可能であることを伝える。そして献血ができないと思い込んでいる知人・家族への伝達を依頼すると、止めていた献血者が献血に再び協力してくれる。

5) 献血者の想いを傾聴する

献血する動機はさまざまであり、献血者の想い

を傾聴する。とくに初回献血者には献血を思い立った動機を尋ねる。動機としては、家族・友人が輸血により命を救われたから、誰かのために役立ちたいから、将来医療職を目指して医療現場を見学したいから、コロナ禍・厳冬期で献血者が少ないと思ってなど、献血者によりさまざまである。しかし共通することは、献血者の優しさや家族への愛情であり、傾聴する私も心打たれる。

2. 献血の呼びかけ

献血者が極端に少ない場合にはプラカードを持ち、検診業務の必要時には即対応できる範囲での献血呼びかけを行う（図2）。なおアドリブを交えた白衣姿の呼びかけは市民の関心を引き、献血推進の効果がより高まる。

3. 貧血時における健康指導

ヘモグロビン値が基準に達しない献血者にはパンフレットを用いて食事指導を行い、鉄を多く含んだサプリメントを紹介する。そして食事療法の成果を確認するためにも、しかるべき期間を置いた献血を依頼する。また医師として献血者のさまざまな健康相談にも気軽に応じると、次回の献血に繋がる。

4. 献血推進ミニセミナー

受付前にて待機中や採血後にて休憩中の献血者に、図表を用いて献血者の減少や血液の重要性を説明する。献血者は献血に対する関心が元々高く、献血への理解がさらに深まるとともに待機時間を有意義に活用できる。



図1 問診時における献血者との会話



図2 街頭での献血呼びかけ

5. その他

1) 施設の献血担当者への働きかけ

移動採血で献血会場を訪れた際には施設の献血担当者に協力への感謝の辞を述べ、イベント開催会場では参加者に献血を呼びかける（図3）。また施設内の各部署に出向いて献血を呼びかけ、献血終了者には同僚や友人への声掛けを依頼する。さらには影響力の大きい施設管理者や市町村長などには率先して献血に協力していただくと、献血者が大幅に増加する（図4）。

2) 献血者の想いを伝える

傾聴した献血者の想いを新聞や雑誌などに寄稿し、社会に広く紹介する。すると関心を抱いた読者が献血に訪れ、さらには新聞やテレビなどのマスメディアが取り上げ、献血推進の絶好な機会に

もなる。具体的な例としては、飲酒で対外試合禁止となった某高校野球部員61名が社会貢献として自主的に集団献血に協力した（図5）。そこで地元新聞に寄稿したら、高校全体で集団献血（250名）に取り組み、さらには地元テレビ局が経緯を放映した。

Ⅱ. 検診医による献血推進の意義

少子高齢社会の急激なる進行に伴い、若年層を中心に献血者が減少しつつある。さらに神経疾患に対する免疫グロブリン製剤の使用量増加に伴い、原料血漿確保量が大幅に増大した。そこで血液の安定供給を責務とする血液センターは増大した血液量を確保するために、より多くの献血者を集める必要がある。そして検診医を含めた血液セ



図3 イベント会場での献血呼びかけ

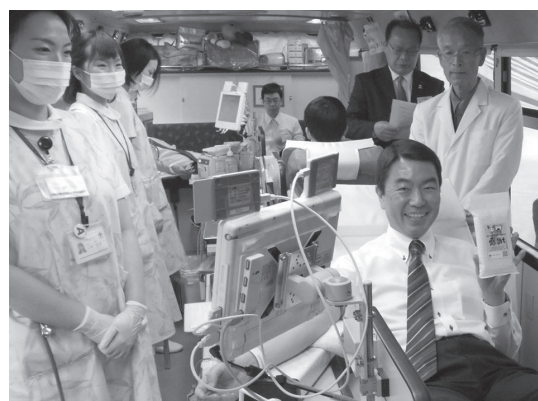


図4 県知事の献血

2018年1月20日
野球部員61名献血
⇒ 2018年2月10日
新聞(河北新報)掲載
⇒ 2018年5月22日
高校献血250名
⇒ 2018年7月28日
テレビ放映

図5 新聞寄稿とテレビ放映

ンター全職員がそれぞれの立場を超え、協力し合いながら献血推進に取り組むことが求められる。

効率的な採血を行うためには、献血者の流れを考慮する必要がある。献血会場では限られた採血ベッドを効率よく運用することが最重要であり、検診医における問診時の鬱滞は絶対に避けることが求められる。また献血開始時にはできるだけ短時間で採血ベッドを満床にするため、検診業務を敏速に行う必要がある。そしてベッド満床で採血待ちの献血者が滞ったら献血者との会話にも時間を割き、献血推進に努める。また受付に並ぶ待機者や休憩中の献血終了者が多い際には、献血者数や血液供給量の推移をグラフ用いて説明する。さらに献血会場の献血者が途切れた際には一人でも多くの献血者を確保すべく、献血会場周辺での献血呼び掛けを行う。なお無関心で通り過ぎる市民には虚しさも感じるが、献血に応じる市民の優しさに心打たれ、血液事業に従事する充実感・幸福感を感じる。

検診医も一体となって献血推進に取り組み、計画を上回る採血を行うと、スタッフ一同が達成感・充実感を覚え、連帯感が生じる。そして日々の成功体験が積み重ねられると、仕事に対する誇りと自信が湧き、血液の安定供給に繋がる。今後は少子高齢化に伴う献血者減少がさらに深刻化し、原料血漿確保量も増大することが予測される。血液センターの責務である血液の安定供給を堅持するため、血液センター全職員が一丸となって献血推進に取り組むことが求められる。

なお新型コロナウイルス禍に伴い、3密を避け、会話を控えるなどの新しい生活様式が推奨されている。献血会場においても感染拡大中はマスクを着用し、小さな声で、しかもソーシャルディスタンスを保ち、可能な限り短時間で業務を行う必要がある。したがって献血者との会話や多人数への献血セミナーなども行い難い状況にある。コロナ感染が早期に終息し、献血者と気楽に語り合える以前の献血環境に戻ることが望まれる。